

岡本貞子歌集『苔の花咲く』

佐佐木朋子

多彩な話法

『苔の花咲く』は、第二歌集から十年あまり間が空いての第三歌集。東日本大震災以前の作品をⅠ、以後をⅡと分けて配列したとあとがきにある。収録歌数は四百首を越える。大会などでの岡本さんの、当意即妙、機転が利いた話術を記憶している方も多いと思う。

本歌集はタイトルこそ地味だが、岡本話術そのままに、自在な切り口の歌が並んでいる。特徴的な表現ごとに作品をまとめてみた。

(1)上の句と下の句の結びつきに意外性を持たせる方法。

- ・ 螻蛄わらわの声じーんと土に沁み込めば寂しくなつてミミズも啼なげり
- ・ 子猫三毛のみど鳴らして眠りをりそろそろ路の躰た覚めむる頃
- ・ 屋月は中川地区の上にある開いてる開い

てる開いてるチューリップ

(2)非現実の会話をモチーフにする方法。

- ・ 「ひとりではもう行きません」目覚めれば唯ひそひそとあかときの雨
- ・ 「頼うたる電子辞書とはこれなるか」夢の中なる父のよろこぶ

会話は相手がいって成りたつものだが、夢での会話は、本質的に非現実で発展性を持たない。現実に関われないという悲哀を一首に呼び込む効果的な方法である。

(3)先入観のない視線が発見するもの。

- ・ 嗚呼なげひむか神話街道行きゆくにタイヤ外せる車ころがる
- ・ このほかに如何なる道もあらざれば落下たろろ夏山の滝
- ・ ひつそりと片足埴輪を作りしは足失ひし壮者たりしか

こうした観察眼、視線は、ありきたりのものは選択しないという態度の成果であろう。下の句は、意外なものを見たいという好奇心があつてこそ見出せたものだ。

(4)感覚を研ぎすます方法。

- ・ 麻酔薬効きくるまでの数分間パン屑運ぶ

蟻を思へり

・ 大蟻が子蟻をぎつちよん殺したり蟻の世界はとでも残酷

(5)〈夫婦とは何か〉を考える歌。

- ・ 林檎ではなかつたのかときよんとす皿の洋梨平らげし夫
- ・ このやうな童子でしたか 寒き夜は頭巾をかぶり眠る吾が背子
- ・ 寂しくもあるか真つ直ぐ前を見て速度五十を夫は守れり
- ・ 夫婦とふ一つ生き方続けをり助手席に居て山道くだる
- ・ 夕晴れの玄関口に大ムカデ 夫を呼ぶから動かずにぬよ

「心の花」の女性歌人は築地正子の影響もあるのか、自分の本質をさぐるうとする姿勢が強い。岡本のそれは「わたしとは何か」というより「夫婦とは何か」という問いに比重がかかる。軽妙な表現は、夫婦の有り様を第三者的に切り取るのに効果的である。

ムカデにまで夫を紹介しようとする妻という「わたし」って何？

おかしさの中にお互いの孤独を、信頼を伴奏しあう夫婦の姿が浮かび上がる。